

# いま手渡したいこと

## 子どもたちに文化を 教師にあこがれと自由を

一年間の連載もいよいよ最終回。今回は、連載の副題にも掲げた「教師にあこがれと自由を」ということについて述べてみたいと思います。

「特別支援教育への転換」が謳われた頃からしばしば耳にすることがあります。「名人芸、職人技の障害児教育ではなく、誰もがができる科学的な教育を」。

言いたいことはわからないでもありません。「名人」に受け持ってもらえた子どもはいけれど、そうでなかったら……。そう考えると、「誰もがができる」を掲げる方法に飛びつきたくもありません。でも、それでよいのでしょうか。

「名人」「職人」という表現には、「敬して遠ざける」といった冷笑的なニュアンスを感じます。しかし、その実践が本当にすぐれたものだとしたら、それを「誰もができることではない」などと言って簡単に遠ざけてしまつてよいのでしょうか。

### 最終回 教師にあこがれと自分の頭で 考える自由を



こしの かずゆき / 1964年生まれ、奈良教育大学教授。専門は障害児教育学。全国障害者問題研究会委員長。著書に『子どもからはじめる算数—すべての子どもに学ぶ喜びを』（共著）（全障研出版部、2017年）など。

#### 奈良教育大学 越野和之

### 「その子の気持ちになる」が生まれるまで

三木裕和さんという教師がいます。現在は鳥取大学の先生ですが、養護学校義務制が施行された時期に兵庫県北部で教師となり、重い障害をもつ子どもたちとの教育実践を切り拓いてきた教師の一人です。

講演などで、三木さんの解説とともに、三木さんが担任した子どもたちの写真を見せてもらうと、話しことばをもたない子どもたちの心の動きが、手にとるように伝わってきます。三木さんくらい、障害の重い子どもたちの動きがわかる教師はいないのではないかと、そんな気持ちにもなります。ところが、三木さんの著作を読むと、若い頃の三木さんは、むしろ自分のことを「子どもの気持ちかわからない教師」と感じて苦しんでいたことが書かれています。

「…天性のものでしょいうのか、初めて重症心身障害児に接しても、子どもの気持ちがとてもよく分かる人たちがいるのです。仮に『分かる人』とでも呼びましょう。…残念ながら、私はその才能に恵まれません。／…あるとき、その『分かる人』とでも呼ぶべき先生が子どもを抱っこし、何やら楽しそうにお話をしている場面に出会いました。／…通りかかった私は、子どものいい表情（笑顔というほどではない）に気がつきました。いつもは苦しそうな表情の多い子どもだったので、私はうれしくなって『いい顔してるねえ』とその先生に話しかけました。／…その先生は私の問いかけにあれこれ答えながらも、その時とても困った顔をしておられました。そして、放課後にこうおっしゃったのです。／『ああいうときは話しかけないでほしいんです。私は

子どもとお話をしているんですから。せっかく子どもが気持ちを開いているので、子どもと話がしたいんです。子どもの表情を見て、教師同士で喜びあう、そんなかわり方もあると思うんですけど、そうしたくないんです。／私は返す言葉を失いました」（三木・原田・河南・白石『重症児の心に迫る授業づくり』一九九七、かもがわ出版）。

三木さんは、こうした経験を契機として、「その子の気持ちになる」ということばに集約される子どもも理解の方法をつくりだしていきます。その詳細こそ紹介すべきなのですが紙幅が許しません。ぜひ三木さんの著作から学んでください。ここでは、この「その子の気持ちになる」という方法が、後には自閉症の子どもたちに対しても生かされ、「この世界で生きていく上で、あまりにも不快感を感じやすい子どもたち」という、三木さんならではの自閉症理解を生み出したこと、講演などで何う子どもたちの内面への深い洞察も、三木さんのこうした努力によってこそ生み出されたものであることを指摘しておきたいと思います。

### ナウシカにはなれずとも同じ道はいける

ところで、三木さんが、先のような経験の後、「自分はその才能に恵まれなかった」という認識にとどまらず、それ以上の努力をしなかったらどうだったでしょうか。天性の「分かる人」たちが形成する子どもとの関係は、いわば「自然に」できてしまうものですから、どうやってそういう関係をつくるのかとたずねても、おそらく本人にもうまく説明できないかもしれませぬ。「才能に恵まれなかった」と自認する三木さんが、しかしさま